

『和歌山市立博物館研究紀要』第30号 掲載論文の内容要約（掲載順）

和歌浦天満宮所蔵「三十六歌仙扁額」と狩野光信

近藤 壮

和歌浦天満宮（天満神社）所蔵「三十六歌仙扁額」は、裏面銘によって、慶長11年（1606）紀州藩初代藩主・浅野幸長によって奉納されたことが確認できる資料である。現存する歌仙絵扁額の中では和歌山県内で最古の資料であるが、これまでほとんど注目されてこなかったといえる。本稿では、その制作背景や制作者について、史料および画風から考察を試みた。その結果、制作者は狩野光信およびその周辺の絵師であり、美術史的にも桃山時代の狩野派による数少ない優品であると結論づけた。

紀州藩の寺社序列と教団組織—天台宗を事例に—

佐藤 顕

本稿は、紀州藩の年頭御礼や御能拝見から藩領内（特に和歌山城周辺）の寺院や神社の序列について明らかにし、特に天台宗を事例として序列の形成過程を検討している。また、寛政期に10代藩主徳川治宝の意向で寺社序列が変容した点に注目し、寺格を上昇させた道成寺と藩主との関係についても言及している。

近世後期の和歌山城下町周辺部における新田開発—鼠島の開発—

小橋 勇介

和歌山市のウォーターフロントに位置する築港は、かつて鼠島と呼ばれていた。鼠島はもともと無人島であったが、一八世紀なかば以降、新田開発が行なわれた。当初は近隣の湊の住人が中心となって開発が進められたが、鼠島の耕地開発は築堤や土盛りなど大規模な普請を伴うもので、多額の費用が必要なものであったため、資本を有する和歌山城下町中心部の住人も参画することとなった。また、開発による耕地の拡大は、島内の耕地所有者同士の相論を引き起こした。

駿河屋伝来・菓子木型資料等の寄贈経緯について（報告） 高橋 克伸・山下 奈津子

紀州藩と深い関わりのある駿河屋に伝来した和菓子の菓子木型等について、博物館への寄贈経緯と寄贈目録を掲載。平成26年（2014）5月、駿河屋の閉店にともない伝来してきた菓子木型等の保存が問題となり、和歌山県・市の文化財関係者が調査を行った経緯とその一部が博物館へ寄贈となった菓子木型等の目録を掲載。

和歌山市「御所遺跡」の須恵器―鳴滝遺跡の表採資料―

前田 敬彦

昭和 27 (1952) 年頃、和歌山市内で「御所遺跡」と呼ばれていた遺跡があり、そこから発見された土器の資料紹介である。この遺跡は、関連する当時の記録類からみて、現在の「鳴滝遺跡」に相当すると判断された。鳴滝遺跡は古墳時代中期の 5 世紀前半頃、国内でも屈指の規模をもつ大型建物群が 7 棟確認された重要遺跡である。紹介した資料は大半が小破片であるが、大型甕・大型器台が多数を占める傾向にあり、初期須恵器の一群と理解される。

和歌山市太田・黒田銅鐸および紀の川（砂山）銅鐸の材質・産地等に関する再検討

平尾良光・西田京平・清水梨代

和歌山市教育委員会所蔵の銅鐸の自然科学的調査を行い、材質および銅鐸の原材料の産地に関する検討を行った。今回測定した外縁付鈕 1 式である太田・黒田銅鐸は朝鮮半島産材料その中でも典型的な値を示している。また、突線鈕 4 式銅鐸である中国華北産領域の中の a、a' 領域に集中していることから、紀の川銅鐸は突線鈕 4 式銅鐸として典型的な鉛同位体比を示していることがわかった。これまでの研究成果からも、銅鐸に用いられる青銅材料の変化は日本列島内の諸勢力と朝鮮半島、大陸との関り方の変化を端的に示しているだけでなく、列島内での技術革新や列島内の勢力の再編といったものも反映していると考えられる。

弥生時代中期後半～古墳時代前期における竪穴建物の変遷～紀ノ川下流域北岸を中心に～

大木要

紀ノ川流域における弥生時代中期後半から古墳時代前期の建物変遷を把握するため、紀ノ川下流域北岸の遺跡にもとづき検討をおこなった。その結果、紀ノ川下流域北岸において円形建物から方形建物へ転換する時期は庄内式併行期であり、方形建物へ転換する背景として庄内式併行期にはベッド状遺構と壁際屋内土坑をもつ建物が 7 割近くを占めることから、播磨地域のなかでも中・東播磨地域の影響を受けている可能性を指摘した。